第一章　無痛文明とは何か

1　無痛文明

苦しみとつらさのない文明は、人類の理想のように見える。しかし、苦しみを遠ざける仕組みが張りめぐらされ、快に満ちあふれた社会のなかで、人々はかえってよろこびを見失い、生きる意味を忘却してしまうのではないだろうか。

「無痛文明」という言葉をはじめて思いついたのは、ある看護婦（師）さんの話を聞いたときのことだ。その看護婦さんは、日本でも指折りの大病院に勤めていた。

あるとき、彼女の受け持つ集中治療室（ＩＣＵ）に、高齢の女性患者が運び込まれてきた。その患者は脳に損傷があった。患者にはモニターが付けられ、栄養と薬が点滴で投与され、温度を適切に管理された部屋のなかで、きめ細やかなケアが行なわれた。患者はさいわいそれ以上症状が重くなることはなく、安定した状態に入った。しかし、その看護婦さんは、ケアをしながら、なんともいえない気持ちになったという。身体を拭いたり、体位を交換するたびに、「私たちはいったい何をやっているのだろう」と疑問に思ったのだ。

というのも、その患者にははっきりとした意識がないのだが、しかし死んでいるわけではなくて、「すやすや眠っている」状態なのである。適切な治療と看護をほどこしているから、患者はとてもしあわせそうに、いつまでもすやすや眠っている。おそらくふたたび目覚めて起きてくることはないであろう。このままずっと、栄養と薬の点滴を受け、看護婦のきめこまやなケアによって身体は清潔に保たれ、温度と湿度を快適に管理された部屋のなかで、ただ気持ちよく眠り続けることであろう。

身体を取り巻く環境を完璧にコントロールされ、それに包み込まれるようにして、やすらかな表情で眠り続ける人間。仕事をする必要もない。勉強する必要もない。人生の悩み事もない。めんどうな身のまわりの雑事に追われることもない。痛みも、不安も、恐怖もない。それらすべてから守られ、楽で、快適な眠りのなかに居つづけるだけでよい。

その看護婦さんは言った。

「結局、現代文明が作り出そうとしているのは、こういう人間の姿なのではないでしょうか」。

現代文明とは、集中治療室ですやすやと眠っているこのような人間を、社会規模で作り出そうとする営みなのではないだろうか。元気そうに働き、楽しそうに遊んでいるように見えても、実はそ

の生命の奥底でただすやすやと眠っているだけの、そういう人間たちを、都市という名の集中治療室のなかでシステマティックに生み出そうとしているのではないか。だとすると、いったい誰がそのような罠を仕掛けたのか。なぜ文明は、この方向へと進んでしまったのか。

2　人間の「自己家畜化」

「無痛文明」の姿をよりよく知るために、少々回り道になるかもしれないが、人間と家畜の関係について考えてみたいと思う。なぜなら、集中治療室の人間にもっとも似ているのは、実は、家畜工場のなかの家畜だからである。狭い檻のなかに閉じ込められ、日光や温度などを人工的にコントロールされ、食糧はベルトコンベアによって充分に与えられ、そうやってただひたすら食べて眠ることが彼らの生になっているニワトリたちのことを想像してほしい。

人間は、家畜にしているのと同じことを、人間に対しても行なってきたのではないか。それをもって文明だと言ってきたのではないか。

（書籍版に続く・・・）